



壇 俳 読 売

矢島 渚男 選

飯粒が碗に貼りつき道元忌

【評】道元の忌日は知られないが、1253年数え54歳で亡くなり、9月29日に永平寺では法要が行われている。飯粒一つも粗末にしない厳格な修行で知られる。作者はこの寺で修行した人かと想像したりする。

東京都 伊東 茂樹

【評】老いて頭が良く「回転」しない。そんなことを知ってか赤トンボが親し気に止まってくれた。何となく嬉しい。率直な句で好きだ。

回転の遅き頭に赤とんぼ

砺波市 野村真里恵

【評】『昆虫記』や『動物記』で知られる学者。今年は植物の牧野富太郎が身近に感じられる年になった。それぞれの不調語りが和む秋

草繁り空き家は人を寄せつけず

浜松市 野畑 明子

角とれて老いとは云わぬ敬老日

宝塚市 広田 祝世

つつましくへくそかすらの咲いており

千葉市 中村 重雄

唐黍や多産多死なる昔あり

飯田市 井原 修

敗戦日語の部はみな卒寿超え

川口市 高橋まこと

焙烙に煎らるる如き迎え盆

長野市 中沢 義寿

鴻巣市 関根 正

宇多喜代子 選

道の駅四方を囲む蕎麦の花

【評】「道の駅」とは近年各地に出来た交易の場。この道の駅の周辺は蕎麦畑。今や蕎麦の花が真っ盛り。そんな立地がよくわかる句。

埼玉県 竹本 遊児

【評】終戦記念の日。この日のための式典に用意された菊の花の白と黄が、戦火に果てた人々への鎮魂の意をよく表している。

白菊と黄菊の献花終戦日

横浜市 福寿たか子

【評】芒原を吹く風。遊んでいる子等をいつしか誘い込み風の仲間にしてしまったようだ。芒原の広さや奥深さ、子供等の表情までが見えてくるような句。

夜の子会話のような独り言

神奈川県 中村 昌男

【評】芒原を吹く風。遊んでいる子等をいつしか誘い込み風の仲間にしてしまったようだ。芒原の広さや奥深さ、子供等の表情までが見えてくるような句。

夜の子会話のような独り言

春日部市 相沢 明子

鈴虫や今日の嬉しき事三つ

山形県 沼沢さとみ

マツカーサーのことなどと思ふ終戦日

高島市 足立てるを

新米と大きく書かれ店頭

三条市 星野 愛

子の描く月の兎は左向き

横濱市 小林 千秋

秋空の深さを映す水溜り

北見市 藤沢 直美

猫の名をふと呼んでみる十三夜

茨木市 木川 志佳

正木ゆう子 選

直ぐ出せる棚へ播鉢とろろ汁

【評】仕舞ってあった播鉢は、ふだん用のより余程大きいのだろう。大家族なのか、好物のとろろ汁には、このサイズが必要。食欲の秋。これから出番の増える大播鉢である。

奈良県 若林 明良

【評】いきなり茎が出て花が咲くまでは何処に球根があるかわからない彼岸花。庭だから見当がつくのか、何となくその辺が気になる彼岸前。

もつ少し見てみたき鳥瓜の花

白井市 酒井 康正

【評】季節が八音なので、残るは九音。いま十音ある前半を一首減らせれば万全だが、このままでも、花を去り難い思いの滲む良い句だと思ふ。

蛸蛸の子蚯蚓手放し逃げ失せぬ

大阪府 池田 寿夫

かなかなの静けさと呼ぶ間合ひかな

奈良市 奥 良彦

ぐい呑みも沢庵もあり夕端居

つくば市 潮田 清

満月や窓全開の工場風呂

川崎市 堀尾 笑王

校門の半分開く夜学校

土浦市 今泉 準一

大相撲四つに静けさありにけり

北本市 萩原 行博

「あつね」を言ひつくしてや夏惜しむ

相模原市 水野しづ子

小澤 實 選

人生でいちばん水分とった夏

【評】この夏非常に暑く、とても永かった。たしかにこの作者の感じたところに共感する。ほくも水筒を持ち歩いて、よく水を飲んだ。肉体を通して、この夏を握えているのだ。

東京都 岩崎 美範

【評】ガパオライスは、肉と紫蘇の一種を炒めたものを飯とともに盛り付け、目玉焼きを添えたもの。このタイ料理を選んだのが現代と思う。

CDを身に纏ひたる案山子かな

日立市 菊池 三夫

【評】衣を着せて、人間に近づけるといふより、光を反射させることで、鳥をおどそうとしている。新しい発想の案山子である。

野分後の空の濃き青明日定年

兵庫県 宗平 圭司

秋晴や進水式の銀の斧

倉敷市 中路 修平

下総の滴る梨に齧り付く

入間市 松原 正憲

水溜り嬉嬉と踏む子や台風程

東京都 天地わたる

サイレンの音の湿りや原爆忌

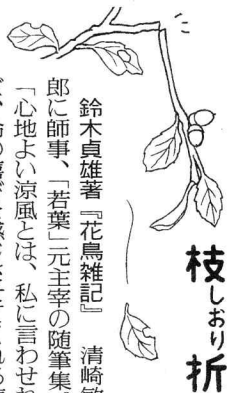
仙台市 鎌田 魁

さんま焼くけむり隣の換気扇

名古屋市 山内 三雅

古希の子が酒下げて来る敬老日

川崎市 西 順子



枝しおり折

鈴木貞雄著『花鳥雑記』 清崎敏郎に師事、「若葉二元主宰の随筆集。「心地よい涼風とは、私に言わせれば、命の喜びを感じさせてくれる涼風である」。実感のある言葉にうなずかされる。

(東京四季出版、3080円)

梶原さい子著『落合直文の百首』

「塔」選者の歌人が近代短歌の源流とされる落合直文(1861~1903年)の歌を鑑賞。△名もしれぬちひさき星をたづねゆきて住まばやと思ふ夜半もありけり▽のように、100年以上前の作とは思えない現代的な叙情に驚かされる。△おくところよろしきをえておきおけば皆おもしろし庭の庭石▽について著者は「直文といふ人が表れた歌」と書く。

江戸から明治の過渡期、自らは一冊の歌集を出すこともなく、新旧の和歌や歌人、都会と地方など「いろいろなもの」を結びつけたと評価する。

(ふらんす堂、1870円)



題字デザイン・イラスト 福田美蘭